

# 思考力・判断力・表現力の育成を促す書道授業の工夫

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
町田市立金井中学校	板垣純子
東京学芸大学	加藤泰弘
千葉県立船橋豊富高等学校	小山明菜
東京学芸大学附属竹早中学校	清水文博
埼玉県立伊奈学園高等学校	鷹啄知美

## 目 次

0. キーワード .....	78
1. はじめに ―本研究の位置づけ― .....	78
2. 本研究の役割分担 .....	78
3. 学習活動の工夫場面の抽出 .....	78
4. 具体的な事例 .....	80
【事例1】〈漢字仮名交じりの書〉 詩の情景を紙面構成に生かす .....	80
【事例2】〈漢字の書〉 外形（概形）を捉えよう .....	81
【事例3】〈漢字の書〉 籠字を取ろう .....	82
【事例4】〈仮名の書〉 文字の字幅と大小から行間を捉える .....	83
【事例5】〈鑑賞〉 キーワードを手がかりに書風を把握する .....	84
5. 事例の検討 .....	85
6. 研究を振り返って .....	86

# 思考力・判断力・表現力の育成を促す書道授業の工夫

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
町田市立金井中学校	板垣純子
東京学芸大学	加藤泰弘
千葉県立船橋豊富高等学校	小山明菜
東京学芸大学附属竹早中学校	清水文博
埼玉県立伊奈学園高等学校	鷹啄知美

## 0. キーワード

思考力・判断力・表現力 書道授業の工夫 課題解決

### 1. はじめに 本研究の位置づけ

書写・書道部会では、平成21年度および22年度のプロジェクト研究を経て、『書道教員を目指す人へ—高等学校芸術科書道の教育実習を充実させるために—』というテキストを作成し、大学における事前事後指導や書道科教育法の授業に活用、さらに公立高等学校における教育実習にも一部提供してきた。本研究では、それらの成果をさらに推し進め、授業力の向上を図ることを目的に、芸術科書道の授業における工夫を具体的な展開例とともに明示した資料を作成することを目指す。教師の説明を受けて書くことを中心にした授業から、生徒が思考・判断し、表現する授業への転換を進めていくことに寄与することを目的とする。

### 2. 本研究の役割分担

本研究では、全体の構想と具体的な事例の作成を荒井が、工夫の場面の抽出やその検討を板垣、小山、清水、鷹啄が、研究全体の振り返りと総括を加藤が担当した。

### 3. 学習活動の工夫場面の抽出

生徒が主体的に関わることができる授業を実現するには、その学習活動を行う場の設定を授業者が考え、意図的に組み込んでいく必要があると考えた。そこで、共同研究者が日常的に行っている書道Ⅰの授業の中から15分から20分程度を目安に、学習活動上の工夫を行っている場面を抽出することとした。以下、表現の三分野、鑑賞、その他に分けて一覧する。

#### 【漢字仮名交じりの書】

古典	教材	内容	ねらい
*	三好達治「雪」	言葉と表現	詩の解釈を毛筆表現に応用する
*	三好達治「雪」	表記を生かす	漢字、かな等の表記を表現に応用する
*	三好達治「雪」	音読を生かす	音読の間や区切りを表現に応用する
*	三好達治「雪」	情景を生かす	情景の読み取りを紙面構成に応用する
楷書、行書古典	三好達治「雪」	古典を生かす	意図に沿う古典を表現に応用する
*	三好達治「雪」	用具・用材	用具・用材を工夫し、表現力を高める
王羲之の行書	校歌	合唱を生かす	合唱の要素を表現や構成に生かす
王羲之の行書	校歌	共同作品	学び合い調和を図りながら書き進める

【漢字の書】

古典	教材	内容	ねらい
孔子廟堂碑	大道	外形を捉える	字形の特徴を捉える 書風を考える
九成宮醴泉銘	清泉	文字の組み立て	文字の組み立てを考える
雁塔聖教序	無形	筆順	点画の形状から筆順を類推する
顔氏家廟碑	春光	蚕頭燕尾	毛筆の動きを観察する
造像記	妙楽自在	籠字を取る	用筆の特徴を捉える 書風を把握する
*	三、川、口、人	行書の基本	点画の連続から行書の基本を考える
集王聖教序	大地	筆路を捉える	虚画の動きを考える
蘭亭序	天朗気清	筆圧の変化	筆圧の変化を可視化する
曹全碑	有志	隷書の基本点画	隷書の用筆を類推する
泰山刻石	皇帝	字形の確認	左右相称の字形を捉える

【仮名の書】

古典	教材	内容	ねらい
高野切第三種	いろは単体	基本用筆	単体に共通する用筆を知る
高野切第三種	連綿	連綿を作る	様々な連綿とその意味を知る
高野切第一種	そてひちて	行の中心	行の中心が自然と流れていることを知る
高野切第一種	はるかすみ	字幅と文字の大小	文字が影響する空間を感じる
升色紙	かはなくさ	墨の潤濁	墨法の作品効果を考える
継色紙	つくはねの	群構成	余白の意味を考える
高野切第一種	そてひちて	紙面構成	行書きを散らし書きにして効果を知る

【鑑賞】

古典	教材	内容	ねらい
唐の四大家	古典カード	書風の比較	書の分類で楷書の書風の相違を理解する
楷書古典	古典カード	書風の比較	キーワードを手がかりに書風を理解する
王羲之、空海、道風	古典カード	書を受容	日本の書を受容と和様化を理解する
寸松庵色紙	うめのかを	そりとゆがみ	散らし書きの特徴を理解する

【その他】

古典	教材	内容	ねらい
*	筆	筆の性能・機能	筆の機能を様々に試す
*	筆	筆の種類	筆の種類を試し用具と表現の関係を探る
*	墨	淡墨と濃墨	墨の濃淡による表現の相違を知る
*	墨	油煙と松煙	墨の相違によるにじみを観察する
*	紙	素紙と加工紙	用紙の相違による表現の相違を知る

今回持ち寄った学習指導の工夫を整理すると、漢字仮名交じりの書が 8 例、漢字の書が10例、仮名の書が7例、鑑賞が 4 例、その他は用具・用材の工夫で 5 例、全34例を挙げるに至った。次項では、そのうち 5 例を具体的に示す。

#### 4. 具体的な事例

##### 【事例1】〈漢字仮名交じりの書〉 詩の情景を紙面構成に生かす

###### 〈ねらい〉

漢字仮名交じりの書の紙面構成は、仮名の散らし書きを援用することが多く見られる。つまり、行頭や行脚の位置や行間を工夫し、余白を生かすという方法である。ここでは、漢字仮名交じりの書の言葉と表現の関係から、詩の持つ情景を紙面構成に生かしていくことをねらいとする。

###### 〈ポイント〉

- ・詩を解釈し、想像力豊かに情景を思い浮かべる。
- ・情景を手がかりに、紙面構成を考える。
- ・情景をスケッチして、それを参考としてもよい。

###### 〈学習活動の実際〉

三好達治の「雪」を題材とする。

###### 雪

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

次のような発問で情景を思い浮かべる一助とするとよい。

- ・都会かな、それとも田舎かな？
- ・家はどう見える？ 隣家との距離は？ 集落かな、家が点在しているかな？
- ・朝かな、昼かな、夜かな？ 空気感はどうでしょう？
- ・声（音）は聞こえるかな？ 静かなのかな？
- ・雪の降り方はどうでしょう？ どんな雪？ どのくらい降っている？ どのくらい積もっている？
- ・雪は今も降っている？ もうやんでいる？
- ・太郎と次郎は兄弟かな？ それとも？

例えば、集落を思い浮かべ、それが雪に覆われている情景を思い浮かべたなら、紙面の中心部に二行を寄り添うように書き、周りに雪をイメージした余白を大きく取ることが考えられよう。家が点在しているのなら、それを生かした紙面構成が考えられる。また、太郎と次郎が兄弟ではなく、各々の家で眠りについているのなら、行間を大きく取る構成も考えられるかもしれない。

###### 〈評価の観点〉

- ・詩を読み込み、解釈することを通じてその情景を描くことができる。
- ・描いた情景をどのように紙面構成に生かしていったらよいかを考えることができる。
- ・情景を紙面構成に生かして表現することができる。
- ・制作された作品を鑑賞する際、表現者が思い浮かべた情景を感得することができる。

###### 〈応用事例〉

- ・漢字仮名交じりの書全般に応用することができる。特に、視覚的に情景が思い浮かべられるものが有効であるが、心象風景を生かすこともできるだろう。
- ・言葉と表現の関係が密接な少字数の書にも応用できる。

## 【事例2】〈漢字の書〉 外形（概形）を捉えよう

### 〈ねらい〉

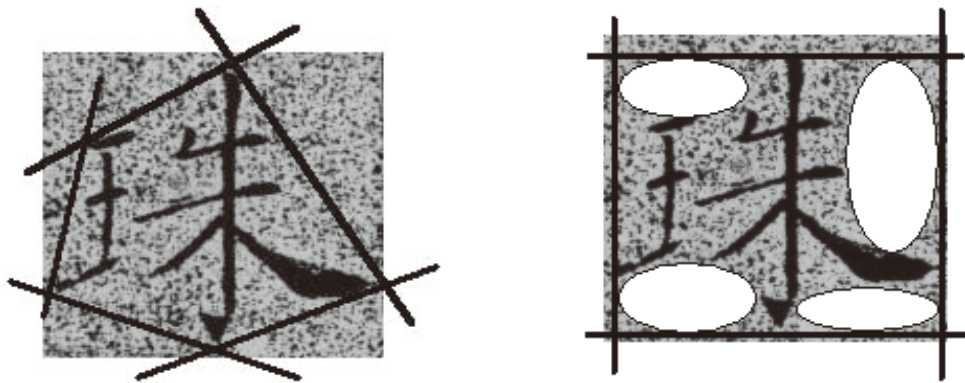
外形を捉えることにより字形の特徴をより視覚的に観察することができる。そして、生徒自身が書いたものと比較検討することにより、生徒自身が自らの課題を発見する手助けとすることができる。

### 〈ポイント〉

- ・活字は多く方形であるが、手書きの文字はその字形に特徴があることを知る。
- ・手書き文字の字形の特徴を、外形を捉えることで把握する。
- ・自ら書いたものと、外形を把握したものを比較して課題を見つけ、課題解決を図る。

### 〈学習活動の実際〉

古典臨書を試書した後、取り組んでいた古典に外形を把握するための補助線を引く。外形を捉えるには突き出た画の先端を結んで特徴的な図形を描くもの（図版左、線的に捉える）と二本の水平線と二本の垂直線が接するところで方形を描き出すもの（図版右、面的に捉える）が考えられる。



次に、同様の方法で試書したものに補助線を引き、両者を比較する。例えば線的に捉えた場合、上の図版でいえば、第八画の起筆と最終画の収筆を結ぶ線が垂直に近くなっていたとすれば、最終画の長さが足りないことが考えられよう。面的に捉えた場合の右上にできるはずの空間（図版で楕円形で示したもの）が確保できていない場合も同様のことが考えられる。

こうして見出された課題を、その解決方法を模索し取り組んでいくことで課題解決が図られ、結果としてその古典が持っている字形の美しさを感じ得ることができる。

### 〈評価の観点〉

- ・古典の外形を把握することができる。
- ・学習者が書いた文字の外形を把握することができる。
- ・前二者を比較して相違を理解し、克服すべき課題を見つけることができる。
- ・課題解決を図り、よりよく字形を整えることができる。

### 〈応用事例〉

- ・漢字の書、特に楷書古典全般に応用することができる。
- ・面的に捉えれば、隷書や篆書の縦横比の把握や確認にも有効な手立てとなり得る。

### 【事例3】〈漢字の書〉 籠字を取ろう

#### 〈ねらい〉

籠字を取るにより、用筆の特徴をより細かく観察することが期待される。点画の形状や太細、変化など用筆の特徴に気づき、表現に生かしていくことをねらいとする。

#### 〈ポイント〉

- ・筆順に従って丁寧に籠字を取っていく。
- ・細かな部分を観察する意識を持って進める。
- ・文字の縁を精確に取るようにする。拓本の場合は白の部分の外縁、肉筆の場合は黒の部分の外縁を忠実に取っていく。
- ・籠字を取って気付いたことを意識し、表現活動に生かしていく。

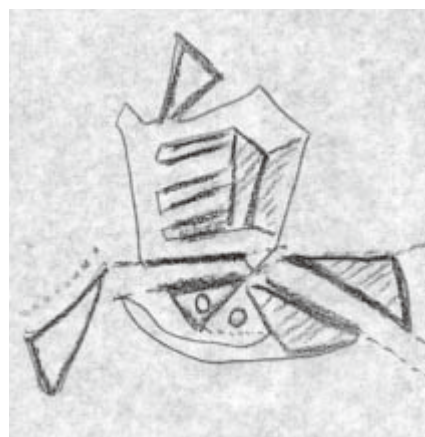
#### 〈学習活動の実際〉

籠字を取る学習を行う際には、なぜ籠字を取るが必要なのか、籠字を取るによって何が分かり、どう表現活動に生かすことができるのかを理解することが必要である。

右図は牛楸造像記に見られる「息」字であるが、ある学習者が籠字を取った後に気付いたことが分かるように図示したものである。これを見ると学習者がいくつかの点について気づきを持っていることが理解される。

まず、いくつかの点画の三角形の形状に気づき意識している。三角形は鋭角的な形状を多く生み出し、それがこの古典の書風の形成に密接的に関連していることが分かる。また、対称形や平行する形状などいくつかの図形的な要素を観察により見出していることが分かる。

また、これらの気づきを集約すれば、この古典の書者が第一画の左払いと下心の第一画、第二画のはね、二つの点をほぼ同じように捉えていたことが理解され、これらの気づきを意識して臨書活動を行えば、無意識に臨書したときと大いに異なる結果が期待される。



#### 〈評価の観点〉

- ・筆で書くときと同じような意識で籠字をとることができる。
- ・細かな部分を観察するような意識を持って籠字を取ることができる。
- ・籠字を取ったことで見えてきた書風を、具体的に捉えることができる。
- ・籠字を取ることで把握した書風を表現に生かすことができる。

#### 〈応用事例〉

- ・漢字の書全般に応用することができる。
- ・特に、特徴的な用筆を持っているものや、変化の著しい古典には有効と考えられる。
- ・行書や草書など動きが大きかったり、点画の連続性が顕著に見られたりする古典ではその構造的性より運筆のリズムを感得することができる。

#### 【事例4】〈仮名の書〉 文字の字幅と大小から行間を捉える

##### 〈ねらい〉

仮名の書は文字により大小の変化が大きく、字幅にも大きな違いがあることが多い。また、文字が存在するには、ある一定の空間を必要とする。そこで、仮名古典の必要とする空間を有機的に囲み、把握することで行の織りなす変化と、行間の流れおよび行の響き合いをを意識して観察し、表現に生かすことをねらいとする。

##### 〈ポイント〉

- ・ 行書きの仮名古典の、その文字が存在するのに必要な空間を意識して行を囲む。
- ・ 必要とする空間は、異物が入り込むと違和感を感じる部分と捉えてよい。
- ・ 必ず、直線ではなく、有機的な線で囲んでいく。
- ・ 囲みの線は、必ず上から下へ、文字を書き進める方向に合わせて進んでいくことが肝要である。
- ・ 行間や行の響き合いを考えながら囲んでいく。

##### 〈学習活動の実際〉

まず、文字が存在するには、ある一定の空間が必要であることを理解する必要がある。これは、仮名に限らず漢字でも同様であるので、漢字一字で実例を示すか、学習者に取り組ませると分かりやすい。

右の図版は、高野切第一種に学習者が実際に書き込んだ例であるが、一行目の「み」と二行目の「や」、一行目の「や」と二行目の「ゆ」のところで空間が接しており、この学習者が、この部分で行の響き合いを感じていることが分かる。

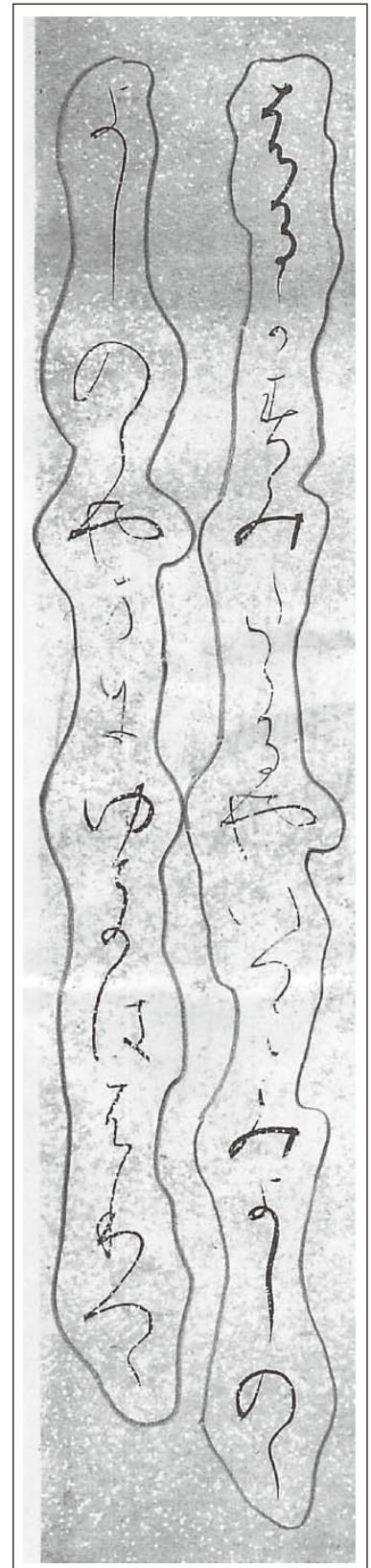
また、他の部分を見てみると、同じような間隔で行間が保たれており、行の流れを作っていることが理解される。

##### 〈評価の観点〉

- ・ 文字が必要としている空間を意識して線で囲むことができる。
- ・ 行の進行方向に向けて囲んでいくことができる。
- ・ 行の響き合いなど、行間を意識することができる。
- ・ 文字の大小や行間の取り方を考えて、表現することができる。

##### 〈応用事例〉

- ・ 仮名古典全般に応用することができる。
- ・ 漢字でも行の流れが顕著なもの、例えば明清の長条幅などには効果的と考えられる。



## 【事例5】＜鑑賞＞ キーワードを手がかりに書風を把握する

### ＜ねらい＞

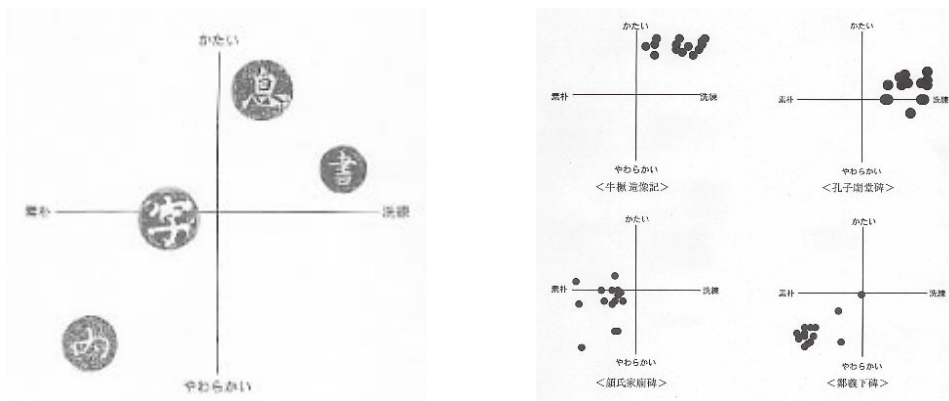
書風を把握したり、言葉に置き換えて表現したりすることは、初学者にとって困難が伴うことが多い。多くの場合、他の古典と比較してどのように感得されるかを考えることになるのであろうが、この事例ではより多くの古典と比較して基本的なキーワードの中でその関係性を考えることをねらいとする。

### ＜ポイント＞

- ・従前の鑑賞の自由記述から、「かたい」―「やわらかい」、「洗練―素朴」という対照的な4つのキーワードを抽出した。
- ・4つのキーワードを十字を切った平面上に配置し、関係性に配慮しながら古典を置いていく。
- ・生徒には「洗練」が良、「素朴」が否と受け取る向きもあるので、「洗練」が味の複雑な高級料理、「素朴」がもぎ立ての果実のように喩えて示すと理解しやすい。
- ・これは答えのある学習ではないので、自らの感性に従って判断するように働きかける。

### ＜学習活動の実際＞

孔子廟堂碑、顔氏家廟碑、牛欄造像記、鄭義下碑の4つの古典のカードを作成し、「かたい」―「やわらかい」、「洗練―素朴」という対照的なキーワードで構成した空間に、その関係性を考慮しながら配置していく。



右に示した図はそれぞれの古典をどう捉えているのかを、●で示したものである。こうした資料を学習者自身が観察することで、他の学習者がどのように捉えているかを知ることができるとともに、自らの感性を確認する手だての一助とすることもできる。

### ＜評価の観点＞

- ・キーワードに沿って、古典の特徴を考えることができる。
- ・配置した古典を、互いの関係性を考慮しながら検討することができる。
- ・なぜその位置に置いたのかを、書の特徴と併せて考えることができる。
- ・他者の配置と比較して、自分の感性について振り返ることができる。

### ＜応用事例＞

- ・他の古典に置き換えても活用することができるであろう。
- ・提示するキーワードを変えることにより、仮名の書でも展開できる。



## 5. 事例の検討

### 【事例1】について

漢字仮名交じりの書の紙面構成は、行頭や行脚の位置、行間の取り方、群を作った構成など基本的には仮名の散らし書きで学んだ要素をより現代的に解釈して行われることが多いのではないかと考えられる。仮名の書においては評価の定まった古筆がそのよりどころとなるであろうから、その構成方法には一定の型が見受けられ、その構成方法を理解し、生かしていけばよいだろう。しかし翻って漢字仮名交じりの書の名品として評価の定まった、あるいは定まりつつあるものを見ると仮名の書の構成方法からは作り出せないものがある。例えば青木香流の草野心平の詩「ゆき」を見ると明らかに雪が降る情景を生かして構成していることが分かる。このように情景の読み取りを構成に生かす試みは、言語活動を充実させること、言葉と表現の関連を考えることにもつながり、構成を考える一つの方法として捉えてよいと考える。

### 【事例2】について

字形を捉えることは、書の特徴を捉えるに当たってとても重要な要素である。もちろん、臨書に当たって用筆とともに字形をよく観察しているとしても、特徴を捉え切るとはなかなか難しい。さらに、そこで取り組むべき課題を見出すには事例で見たような、客観性を持った取り組みが功を奏すると考える。ただし、ここで大切なのは、学習者自らが見出した課題の妥当性の担保であろう。課題が妥当であれば、その後の課題解決の取り組みもその成果が期待されるが、そうでない場合、学習活動の意味を喪失しかねない。課題の当否を確認するための相互評価や教師による支援が必須であると思われる。

### 【事例3】について

籠字を取って用筆を考え、書風を捉える助けにしようという考え方は古くから存在する。第一義的には、籠字を取ることそのものに書くという行為をより精密に行うという意味を見出すことができよう。第二義的には、籠字を取ることによって新たな気付きを誘発するということが考えられよう。新たな気付きは課題意識として認識され、課題解決を考えた学習へと展開する。この事例の場合、籠字は古典そのものに施されるから、各々の学習者が何に気付きを持つことができたかの成果を持ち寄ることで、その集団の共通課題を設定することも可能となる。集団が協働して見出した課題が設定されれば、学習目標を明確化するという効用も期待できる。

### 【事例4】について

仮名の書が持つ変化と調和は学習者にとって捉えにくいものの一つといえる。これは均質的な活字を見ることに慣れ、それが日常化していることが要因の一つと考えられようが、この変化と調和を感得しない限り王朝仮名の妙に触れることはかなわないであろう。本事例では、それを囲みの線を施すことで可視化して強く印象づけるには有効な手立てと考える。また、その空間を意識することで行間の響き合いを捉えることも期待できる。行書きを切り貼りして散らし書きに展開する学習も多く見られるが、短冊状に切断するよりもこの方法の方が有効であろう。問題点は、仮名の書に顕著に見られることの多い潤濁にまで踏み込めていないことだろう。視覚的に潤の部分は手前に感じられ、滑の部分は遠方に感じられる。平面からより重層的に観察することができればより多くの学習効果が期待される。

### 【事例5】について

確かに、鑑賞で感じたものを言葉に直して表現することは難しい。特に、初学者にとってはたとえ多少陳腐と思われる評語によってでも書風を置換できれば、その後の展開を図ることも考えられてくる。本事例では、比較的理解されやすい評語を用いてその関係性を探っているが、今後はこの鑑賞を深化させていく手立てを考えていくことが求められよう。また、初期段階でこうした学習を推し進めるにしても、扱う古典によって評語の再検討は避けて通れない。どのような場合にどの評語がふさわしいか、ある程度評語を多く示し、俎上に載せて詳しく検討していく必要があると考える。

## 6. 研究を振り返って

ここでは、本研究をさらに深化・発展させるために、思考力・判断力・表現力等の育成についての基本的な考え方を再度、確認・整理して今後の方向性を考えていくこととしたい。

知識基盤社会の到来、グローバル化の進展という急速に社会が変化する中で、幅広い知識と柔軟な思考に基づき、適切に判断する力の育成が求められている。また、近年のPISA学力調査や学力学習状況調査等の結果を踏まえ、生徒の読解力や知識・技能を活用する力に課題があることが明確になっている。これらを受け、平成19年6月に公布された「学校教育法」の一部改正により、教育の目標が示されるとともに以下の点が規定された。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。（第30条第2項、第62条） 下線は筆者

また、この「学校教育法」の改正を受けて示された平成20年1月17日の「中央教育審議会答申」では、この思考力、判断力、表現力等を育成するために次のような学習活動が重要として、以下の6点を提示している。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>①体験から感じ取ったことを表現する</li><li>②事実を正確に理解し伝達する</li><li>③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする</li><li>④情報を分析・評価し、論述する</li><li>⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する</li><li>⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる</li></ol> |
|--|

これに加えて、言語は知的活動、コミュニケーション、感性・情緒の基盤である視点から、言語活動の充実を図ることを通して、思考力・判断力・表現力等を育成していくことが重要とし、各教科・科目で記録、要約、説明、論述、討論等を学習活動の中に取り入れていくことが大切であるとしている。

これらの学習活動を書道の授業において展開する場合、次のような内容が検討できよう。①では、生徒が日常生活や体験活動などで感じ取ったことを自分の言葉で表現し、その言葉にふさわしい表現を考え、作品を構想し表現を工夫していくことなどが考えられる。その際には例えば、第3章の【その他】で示した用具・用材を通しての学習が深く関連してくる。②、③、④では【鑑賞】で示した書風の比較や分類・整理等の学習が関連している。書風を表す述語「素朴」「洗練」や「重厚」「繊細」等、対比させて判断する学習は多くの古典で検討していくことも可能であろう。⑤では、例えば【漢字仮名交じりの書】で示した、名筆（古典、古筆や近現代の優れた作品）等の表現の良さや美しさを感じ、それをもたらす要因を分析的に捉え、それを踏まえ表現要素を生かして作品を構想し、表現の工夫・改善を行っていくことなどが考えられる。⑥は全体に共通する視点である。本研究の第3章で提示した学習活動上の工夫の多くは、グループ活動を通して展開していく。書道教育の授業の改善は、グループ活動をいかに効果的に取り入れるかを考えることが極めて重要な視点であると思われる。お互いに意見を交換することで、自分や他人の考えを深化させる学習活動の工夫が求められる。

書的な思考や判断は、書の作品そのものと直接対峙することで深化していく。作品のよさや美しさを直感的に感じ取り、また分析的に捉えることを通して思考し、判断し、創造的な鑑賞へと深化させていくことが重要である。また、この思考や判断の過程において、言語活動と積極的に結びつけることによって、自己の考えの輪郭が明確になっていく。さらに、自分の考えを確かな言葉で伝え、グループ等での意見交換を通して考えを発展させていくことが大切である。このように書道教育においても、思考力・判断力・表現力等の育成は「言語活動」と

併せて展開されることで、より根柢をもった学習となっていく。一方、書の美しさや優れた書の表現に感動する情感豊かな心を育てるためには、言葉になる以前の感覚、書的感受が重要であることは言うまでもない。

本研究では、これまでのプロジェクト研究等の成果を踏まえ、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する授業の工夫の場면을整理し、事例を提示することで具体的な学習活動が明確になるようにしている。事例の作成にあたっては、附属中学校や公立高等学校の教員の意見を取り入れ、生徒の実態に応じて授業の工夫を図ることができるよう検討を重ねている。これらは、生徒が思考し、判断する授業への転換を図る授業改善のためのヒントになると同時に、大学教員養成課程における教科教育学の授業と関連を図ることで学生の授業を構想する指針として活用することが期待できる。しかしながら、本研究では、実際の具体的な指導事例を示したのは5例に止まっている。今後は、他の工夫場面においても検討し、単元の学習計画や各授業における位置付け、具体的なワークシート等を示して、生徒の思考力・判断力・表現力を育成するための指導事例集として体系的に整理することが求められよう。また実態の異なる様々な生徒に対して授業を行った上で、生徒の学習の実現状況を把握して、工夫の手順や方法等を検討することが重要であろう。